

「死」を考える

～人生をかけたがえのないものにするために～

バッハの宗教音楽に現れた

「死」の思想

2012年7月23日

水野隆一

(関西学院大学神学部)

# 音楽の解釈

- 音楽の持つ「抽象性」「象徴性」  
解釈を必要とするが、言葉にして表現するのは  
難しい
- 宗教音楽の場合、多くは詞を持つ  
詞の解釈を基に、音楽の持つ「意味」を関連させて  
解釈する必要

# ヨハン・ゼバスチアン・バッハ

- ドイツ、バロック時代の音楽家、1685～1750年
- オペラ以外の当時の音楽はすべて作曲したが、主な作品は、教会の礼拝で演奏されるためのもの  
の 教会カンタータ、《マタイ受難曲》など
- ライプツィヒの「カントール」1723～1750年  
2つの教会における礼拝で聖歌隊を率いて音楽を演奏する職務

# 来たれ、甘き死よ

- 《シエメツリ歌曲集》 (1736年) 第33曲  
(BWV478)
- 作詞者不明
- 死を「別れ」ととらえる一方、「眠り」とも考えている

# カンタータ 156番

“Ich steh mit einem Fuss im Grabe” (BWV 156)

《わたしはすでに片足を墓穴にかけて》

- 公現後第3主日用、1729年1月29日初演(?)
- オーボエ、弦楽合奏、通奏低音、合唱
- 作詞者不明
- 当日の福音書は、  
マタイによる福音書8章5～13節

# 第1、2曲

- 第1曲: シンフォニア
  - チェンバロ協奏曲へ短調(BWV1056)第2楽章の転用
- 第2曲: アリア(テナー)とコラール(ソプラノ)
  - ヴァイオリン・ユニゾンと通奏低音を伴奏とする2重唱
  - 下降する音型が特徴的

# 第3、4曲

- 第3曲: レチタティーヴォ(バス)
  - 「家長」的存在としてのバス
  - 厳しい不協和音、「死」を表す音型
  - 最後はアリオーソに
- 第4曲: アリア(アルト)
  - オーボエ、ヴァイオリン、通奏低音の「トリオソナタ」
  - 「喜び」を表す音型

# 第5、6曲

- 第5曲: レチタティーヴォ(バス)
  - 「魂の健康」
- 第6曲: コラール
  - 死は神によって備えられた「最善の道」
  - フレーズの中に、オルガンによる即興演奏が入る = これまでの楽曲のフレーズ  
カウンタータの内容をふり返る



# バッハの宗教音楽における 「死」

- 「苦痛」「恐怖」であるのと同時に、  
甘美で慕わしいもの      現世からの「解放」  
   イエスと共にいる
- 「生」も「死」も、神の計らいによる
- 「最善」を計画する神への信頼こそが、「生」に意味を与える

「死」を考える

～人生をかけたがえのないものにするために～

バッハの宗教音楽に現れた

「死」の思想

2012年7月23日

水野隆一

(関西学院大学神学部)